

自伝的記憶の想起における懐かしさ感情の働き

学位論文内容の要旨

本研究は、自伝的記憶想起における懐かしさ感情の働きを心理学的に検討したものである。まず、(1)懐かしさ感情の構成概念および、機能・特性の検討を質問紙研究により行い、(2)得られた知見にもとづき、自伝的記憶の想起と懐かしさ感情との関連性について実験心理学的に検討した。

本稿は8章から成る。以下、各章の概要を述べる。

第1章では、自伝的記憶および、懐かしさ感情に関する心理学的研究を概括した。まず、自伝的記憶の先行研究において指摘されてきた、自伝的記憶の構造や想起の機能・特性について概観した。次に、懐かしさ感情の定義や認知機能に与える影響について先行研究をまとめ、その問題について述べた。最後に、懐かしさ感情、および懐かしい記憶と自伝的記憶との関連性について、本稿で用いたそれぞれの研究パラダイムを示した。

第2章～第7章では、(1)懐かしさ感情の構成概念、(2)懐かしい記憶の機能・特性、(3)自伝的記憶と懐かしさ感情との関連性についてそれぞれ検討した。本稿から得られた結果を以下に示す。

1. 懐かしさ感情の構成概念の検討および、懐かしさ感情尺度作成の試み(第3章)

先行研究において、懐かしさの定義は研究者により大きく異なっており、懐かしさ感情の構成概念の検討が必要であると考えた。そこで、懐かしさの構成概念について検討した(研究2)。また、懐かしさ感情に関する尺度として、Batcho(1995)やHolbrook & Schindler(1991)がそれぞれ尺度を作成しているが、いずれも懐かしさ性向を測るものであった。しかし、懐かしさと認知機能との関連性を検討する際には、喚起された懐かしさの程度を測る必要がある。このことから、研究2では同時に懐かしさの程度を測定する尺度の作成を試みた。本研究の結果、懐かしさ感情について因子分析を行った結果、“リラックス感情”、“ポジティブ感情”、“哀愁感情”の3因子30項目が抽出され、これを懐かしさ感情尺度とした。

2. 懐かしい記憶の機能・特性の検討(第4章、第5章)

自伝的記憶では、記憶により感情価や、保持期間、想起頻度が異なることが明らかにされている(Conway, 1990; Pillemer et al., 1996; Wagenaar, 1986)。それに対し、懐かしさ感情を伴う自伝的記憶の特性については検討されていない。懐かしさ感情はポジティブ感情とネガティブ感情の両方を内包

すると考えられることから、懐かしさを伴う自伝的記憶は固有の特性を持っていると考える。そこで研究3では大学生から高齢者までを対象に懐かしい記憶の特性について検討した。結果から、懐かしい記憶はポジティブ価、想起頻度、重要度、鮮明度が高いことが示された。また、懐かしい記憶ほど他者に話す回数が多く、コミュニケーションの1つとして用いられることが明らかとなった。

次に、Sedikides et al.(2008)は、懐かしさ感情の喚起に機能があることを指摘している。しかし、懐かしさ感情を喚起することは、同時に自伝的記憶を想起(回想)することでもあり、自伝的記憶の想起(回想)には、それ自体に機能があることが知られている(Webster, 1993, 1997)。このことから、研究4では、懐かしい記憶の機能を明らかにすることを目的とした。結果、Webster(1993, 1997)の示す8つの機能のうち、“死の準備”、“アイデンティティ”、“問題解決”、“会話”、“親密さの維持”、“辛い経験の再現”、“情報知識の提供”の7つの機能が、懐かしい記憶の機能として用いられていることが示された。また、懐かしい記憶は年齢により機能が異なることが明らかとなった。

3. 自伝的記憶の想起と懐かしさ感情との関連性の検討(第2章, 第6章, 第7章)

先行研究により、懐かしさ感情は気分や記憶などの認知機能に影響を与えることが明らかにされている(Batcho, 1998; 小林・岩永, 2002; 小林他, 2002)。しかし、先行研究の問題点として、先行研究では懐かしさの程度を7件法で測っており、懐かしさを正確に捉えているとは言い難い。また、懐かしさ感情がどの時期の記憶に影響を与えているのかが明らかにされていないことが挙げられる。そこで研究1では懐かしさが自伝的記憶に対する反応時間に及ぼす影響、研究5では自伝的記憶の想起時間に及ぼす影響をそれぞれ検討した。

結果は以下の3点にまとめられる。(1)聴取経験のある音楽に対して懐かしさを強く感じた参加者は、音楽をよく聴いていた時期の記憶に対する反応時間および、想起量に促進効果を及ぼす。(2)1-2年の記銘時期の差があっても同じ時期(例:小学校の高学年)であれば、同様の促進効果を及ぼす。(3)懐かしさは懐かしさが喚起されなかった時期の記憶の誤再認を増加させる。

懐かしさが自伝的記憶の想起に影響を及ぼすことは、先行研究や研究1、研究5で明らかにされている。しかし、反対に自伝的記憶が懐かしさ感情に及ぼす影響を検討した研究は少ない。研究6では、自伝的記憶の想起が、懐かしさ感情の喚起に及ぼす影響を調べた。その結果、自伝的記憶の想起量や出来事の想起時期における、懐かしさ感情への影響は見出せなかった。次に、想起した出来事の特徴が懐かしさ感情に及ぼす影響を検討した結果、ポジティブな出来事は、懐かしさ感情を喚起させることが示された。

以上より、大きく以下の三つの成果が得られた。第一に、懐かしさ感情の構成概念について、本稿の結果から、懐かしさ感情はポジティブ感情とネガティブ感情の両方を内包する複雑な感情であると考えられる。しかし、本研究で示されたネガティブ感情とは、悲しみや怒りといった原初的な感情ではなく、“切ない”や“離れがたい”といった微妙な色相をもつものであった。哀愁感

情因子は懐かしさ固有の因子であると考えられる。

第二に、懐かしい記憶の機能について、Webster(2003)によると、RFSの8因子は社会・成長、社会・喪失、自己・成長、自己・喪失の4つに分類できると考えられている。研究4で明らかとなった懐かしい記憶の機能は、この4つの分類すべてを満たすものであり、このことから、懐かしい記憶は幅広い機能を有していると考えられる。また、懐かしい記憶の特性であるポジティブ価、想起頻度、重要度、鮮明度が高い特性に加齢による差異はみられないが、機能による加齢の影響があることが明らかとなった。懐かしい記憶は年齢により機能が異なり、各年齢固有の回想機能を促進させることが示された。

第三に、懐かしさは自伝的記憶の反応時間と想起量のそれぞれに促進効果を与えることが示された。また、懐かしさは懐かしさを感じさせる時期のみ効果を与えることが明らかになった。この結果は、自伝的記憶の時間的体制化を支持している(Anderson & Conway, 1993; Wright & Nunn, 2000)。つまり、懐かしい音楽を聴いていた時期の記憶が活性化しても、時間的に異なった場所に保持されている、異なった時期の記憶が活性化されなかったためだと考えられる。また、懐かしい音楽は必ずしも、音楽の流行していた時期の記憶を活性化させるのではなく、個人がその音楽と最も接していた時期の記憶を活性化させることが明らかとなった。

なお、本稿の臨床的応用として、近年、高齢者の心理療法として医療福祉領域で行われている回想法があげられる(回想法とは、回想を誘導する写真や音楽などを用い、認知症高齢者でも比較的保たれている自伝的記憶の想起を活用することで、情緒の安定、意欲の向上、認知機能の維持・向上、ADLの向上などを目的とする技法である)。回想法の有用性は多くの研究で報告されているが(黒川,1994,奥村・藤本・成田,1997)、回想法の問題点として、一定の手続きが確立されておらず、効果の一般性が明らかになっていないことがある。本稿で得られた知見から、特定の時期の懐かしい音楽を聴かせれば、その時期の記憶の想起を促進させることができる(研究1, 研究5)。また、懐かしさは“自己”機能や、“社会”機能など、幅広い機能を有していることが示唆されている(研究4)。これらの知見は回想法の効果である、心理的安定や、自我統合などにつながると考えられる。以上のことから、認知症高齢者を対象としても、懐かしさが自伝的記憶の想起に影響を及ぼすのであれば、懐かしさ感情をツールとして用いた、より効果的な回想法のアプローチを示唆することができるだろう。

学位論文審査の要旨

主査	教授	仲	真紀子
副査	准教授	安達	真由美
副査	准教授	平澤	和司

学位論文題名

自伝的記憶の想起における懐かしさ感情の働き

日常生活のなかで、人はしばしば「懐かしい」という感情を体験する。しかし、「懐かしさ」が心理学的にどのような感情であるのか、「懐かしさ」には「過去」との関わりがあると考えられるが、それはどのような「過去」なのかといった問題には十分な光が当てられてこなかった。本研究は、心理学的な体験として重要であるとされながらも、研究されることの少なかった懐かしさ感情を取り上げ、自伝的記憶（思い出、自己をかたちづくる記憶）との関わりを調べたものである。実験法、調査法という認知心理学的方法を用い、懐かしさ感情の構成概念、懐かしさを伴う記憶の機能、特性、懐かしさ感情と自伝的記憶の想起の関係性を明らかにした。

以下、当該研究領域における本論文の研究成果について本審査委員会の評価を述べ、その上で審査結果を述べる。

1. 当該研究領域における本論文の研究成果

本研究の成果として、以下の三点を挙げることができる。第一に、本研究により、懐かしさ感情の構成概念、懐かしさを伴う自伝的記憶の特性や機能、そして懐かしさ感情が自伝的記憶の想起に及ぼす影響や自伝的記憶が懐かしさ感情の喚起に及ぼす影響が明らかになった。特に、懐かしさ感情がポジティブ因子、リラックス因子、哀愁因子により構成されること、懐かしさ感情を伴う自伝的記憶はポジティブで重要で鮮明であり、コミュニケーションの話題として利用されやすいこと、そういった記憶は死の準備、アイデンティティ、問題解決などの様々な機能をもち、その機能は年齢により異なること、そして懐かしさ感情は、その感情が結びついていてと考えられる特定の時期の記憶を喚起すること等、懐かしさ感情や懐かしさ感情を伴う記憶について、多くの基礎的知見が明らかになった。

第二に、本研究で作成された懐かしさ感情尺度、懐かしさを伴う自伝的記憶の機能を測定する尺度（日本語版回想機能尺度）、および実験パラダイムは、今後、懐かしさ感情、懐かしさ感

情を伴う自伝的記憶、懐かしさ感情と自伝的記憶の関係性についての研究を進めていく上で有用な道具となる。

第三に、本研究で得られた懐かしさ感情と自伝的想起の関係性の応用可能性が挙げられる。著者が示しているように、自伝的想起を想起する活動は「回想法」として、認知症を患う高齢者等の認知機能を活性化するために用いられている。しかし、どうすれば想起を促進できるのか、例えば音楽を手がかりとした場合、それはどのような効果をもつのかといった問いへの答えは明らかでなかった。本研究の成果は、こういった問いに対する答えを提供し、実践的な活動にも示唆を与えるものである。

2. 審査結果

本研究は、懐かしさ感情の構成概念を明らかにし、懐かしい自伝的記憶の特性や機能、そして懐かしさ感情と自伝的記憶の想起の関連性を明らかにした。懐かしさ感情が3因子からなること、懐かしさ感情を伴う自伝的記憶には特定の特性や機能があること、そして懐かしさ感情は特定の時代の自伝的記憶の想起を促すこと等の知見は新しく、重要である。これらの知見は、これまで検討がなされてこなかった懐かしさ感情について研究する道を切り開き、また、従来の自伝的記憶研究の成果を深化させ、拡張するものである。今後の課題として、懐かしさ感情の文化的側面、調査・実験の対象者の拡張、自伝的記憶を想起させる音楽の特性等の問題はある。しかし、これらの課題は本研究の意義を低めるものではなく、むしろ本研究のテーマの価値を再確認させるものである。本研究の成果の一部は、国内外からの照会や学会での報告依頼などのかたちで、一定の評価を得ている。以上のことを総合的に評価し、本委員会は、本論文の著者瀧川真也氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。